障害者　輝ける役割探るとき

標題は朝日新聞 4 月 29 日朝刊の松井彰彦「経済季評」。示唆に富むので抜粋して紹介したい。　―国際貿易から障害者福祉まで、様々な経済社会現象の根幹にあるのが分業の利益だ。この点を、市場の役割と絡めながら考えてみたい。

私たちはみな、意識するしないにかかわらず、社会の中で分業を行っている。福祉施設でも、健常者と知的障害者の間で分業が行われている。たとえば、健常者が事務や監督作業を手がけ、知的障害者が単純な軽作業を担うことなどがそうだ。多くの知的障害者は、最低賃金をはるかに下回る、時給換算で 50 円や 100 円を工賃として受け取る単純繰り返し作業に従事している。もちろん、ほかの作業が難しいという方もいるだろう。障害の程度、種類は多様だからだ。しかし、私たちはこういった分業を、当然のことと考えてはいないだろうか。社会における分業のメカニズムの中で、障害者の役割が袋詰めやホチキスどめなどの単純作業にある、と思い込んではいないだろうか。

「障害者だから保護する」「冷徹な競争原理が支配する市場の場には出さない」という考えだけでは、その人の価値を見いだすことはできない。障害者は福祉の対象かもしれないが、だからと言って市場で活躍する機会が失われる必要はない。障害者が市場で活躍する後押しをすることも、福祉の役割となり得る。こうした考えのもとで分業を行う大阪の福祉施設「アトリエインカーブ」を、2 月に訪問する機会があった。理事長の今中博之氏のオフィスに入ったとたん、一枚の絵に魅せられた。「よさこい祭り」と題し、踊る「人物」が 7 人描かれている。その「人物」の一人ひとりが個性的で面白い。色合いが鮮やかで部屋を明るくしてくれそうだ。「いま売り出し中の阪本剛史さんの作品」という。外の社会で知的障害者と呼ばれる人たちは、インカーブではアーティストであり、健常者はその創作活動を支援するスタッフだ。インカーブのアーティストたちの作品は市場で、他のアーティストと同様に評価される。3 月にあった現代美術の作品が集う「アートフェア東京 2017」において、阪本さんの作品には「売約済み」を示す赤いシールが何枚も貼られていた。市場は弱肉強食のジャングルではなく、「社会的弱者」と呼ばれる人々が活躍できる役割を見つけ出し、その力を発現する場でもある。

阪本剛史さんの作品「よさこい祭り」＝アトリエインカーブ提供

写真は自宅棚に置いてある「はたらく仲間のうた」卓上カレンダー。表紙は「かめのココちゃん」。毎月の作品も楽しく興味が尽きない。わが家でも毎日、障害者の「輝ける役割」を見ている。

（2017 年 5 月 9 日）